

「風土にあった畜産を考える」

1997年度シンポジウムは「風土にあった畜産を考える」と題して、1997年12月10日午後1時30分からKKR札幌にて、約90名の参加の下で開催された。

伊藤 稔氏（北海道農業試験場）を座長として、落合一彦氏（風土に根ざした酪農における放牧の位置づけ：北見農試専技）、黒沢信次郎氏（都市近郊酪農の特性について一道央地域酪農の場合一：サツラク農協組合長）からの話題提供がなされた。その後会場から質問が出された。

以下の要旨は当日の討論をまとめたものである。

座長：ただ今、落合さんより風土に根ざした酪農における放牧の位置づけと題する講演がありました。何かご質問がありましたらお受け致します。

大久保正彦氏：表5の所を簡単に質問したいのですが、ここで集約放牧と省力放牧と言う言葉を使用されていますが、それはどのように使い分けられていますか。

落合一彦氏：きちんとした定義は無いのですが、土地生産性の向上に力点を置いたやり方、例えば刈り取りの併用利用とか兼用利用とか、掃除刈をまめにやったり、毎日放牧では日に二回転牧をやるのを集約放牧と言う感じで、省略放牧とは手を掛けないで多少土地生産性は落ち、土地からのTDN収量は低くなるが、inputも少ないから、その差が儲かると言うイメージの差であります。

.....

座長：これから総合討論と言う形で風土にあった

畜産を少し考えて行きたいと思います。質問または発言される方は所属とお名前を先に言ってからお願いしたいと思います。今日の話しを伺っていて、とても面白く、たいへん良い話が出てきたので、私のまとめたものから紹介します。最初の落合さんの話しは、現在風土を無視した酪農が押し進められ、それが問題となっていると提言されました。風土に根ざした酪農の条件を五つ上げられ、その酪農を行う一つに放牧があり、その放牧が成り立つ条件として、土地面積・放牧と刈り取り・放牧とトウモロコシの土地生産性・放牧をするメリットについての話がありました。その要件の一つにその土地でどのような草が出来るかという話、放牧時の草種の選定や放牧がうまくいっている例を紹介して頂きました。その次の田中先生的話はこの経済状況が極めて厳しい中で畑作酪農家がいかに生き延びて来ているかを説明され、風土と言うよりはむしろ酪農家の考え方に重きをおき、生き残って行くための戦略、例えば情報処理とかパソコンを使うとか自己責任型で自分の酪農を自分でやっていく方向に勉強することが大事であるという話でした。それから、黒沢さんの話は田中さんの話をもっと進めて建土・建民の思想で難局を乗り切ってここまで来た、それも都市近郊という消費地に近い利点をフルに回転させてやってきた、という話でした。

要約しますと今ある風土にあった酪農を行うべきであるということになりますが、落合さんの場合はかなり風土的な話、田中さんはそれを踏まえて酪農家はどのようにやってきたか、それから黒沢さんはその波をくり貫けて次の展開を考えていると言えると思います。今日のシンポジウムを、かなりラフですけども整理させていただきました。それではご意見をお願いします。

西部慎三氏：今日の話の風土については、私は北海道の農業は本格的にはこれからであると思います。北海道で根ざして北海道で育った3～4代目です。もはやここで生まれ育ったのですから本当の意味での地に付いた風土に根ざしているのです。北海道を作るのはこれからであると思います。100年経って、これからと言う方向は何かと言いますと、先ほど田中先生が言ったような官から民、組織から個と言っておられる。それから黒沢先生の話聞いて、まさに農を風土に根ざしてやってきて近代化して100年の歴史がある。風土に根ざしたと言うことで重要なことは生活が付いてきていると言うことです。戦後の酪農は単なる乳搾りやさんであった。あれは農ではない。農と言うのは自分で搾った牛乳は自分で処理して消費者に渡していく、これが基本であります。これも官主導型であった。そして、今の酪農になってきた。本当の酪農はこれからだと考えます。田中さんが言ったようにその現れが中標津の方でも自分で搾った牛乳は自分で加工し、消費者に売するような酪農家、自分でバターやチーズを作るという農家が出てきた。まさに酪農になりつつある。だから、まさにこれからである。この点において落合さん、技術的な話、地方の利点をうまく生かして、そこに定着する技術を作り、そこにはまた生活がある。スエーデンの話で林檎の木の下に綿羊を放牧したり、酪農の話に綿羊がいて、その生活の中にいて酪農家は生活をどのようにエンジョイするかと言う当たりを外国の例を入れて話して頂きたいと思います。

落合：それは食生活に一番端的に現れていると思います。日本人は今まで稲作中心で、北海道でも米が主食であり、それはそれで良いと思いますが、最近北海道でもいろいろ自家製のチーズを作って、それを自慢する所も出てきています。きっとヨーロッパ当たりには何百年の歴史があると思います。最近、北海道でも自分の農業や酪農をやつ

ている中で、食べ物、自分が作っている物の一部を美味しい物にしようというゆとりがでてきています。また、三友さんの所では馬を飼っていましたが、馬を飼うことは都会ではできません。そう言う自分の置かれた所を原点として、食べること、遊ぶことに価値あるものをたくさん見つけていると思います。それは3～4代になって出来てきたのではないかと思います。

西部：結構です。お二人の先生方何かありましたら。

田中：風土と言うのはどうしても農村社会の昔からあるタワーサイロが立ってキング式牛舎があつて、運動会が地域ぐるみでやられて祭りがあつてというのがどうも風土と言うのか農村社会のイメージに思いがちですが、私はそうは思いません。風土と言うのは現在の環境に適應する形を形成して今後の環境に対応出来るだけの方向性を作るのが風土であると思います。いずれにしても自分が生きるための、または生活するための生き方が風土だと思っています。

黒沢：酪農経営と言いますが、酪農経営＝酪農生活。むしろ酪農生活と言った方が良いのではないかと思います。酪農家というのは家にいて働いているのです。すぐ側に牛舎があつて家から牛舎・畑へと、牛舎から帰れば家と、だから生活と作業が一体となつて分けられないのです。家族労働の場合はまさに酪農生活であります。酪農におけるゆとりとは心の問題ですから必ずしも時間の問題ではないと私は思います。酪農生活をする中に牛と共に自然の中でいろんな人間としての生きがいと言うものがたくさんあります。今食べ物と言われましたが、去年の私が全戸回る共励会に自給野菜をどれだけ作っているかということ聞いて回りました。殆どの農家で作っていて、自分で食べる他に余った野菜を有機野菜と言って販売しています。これもまた風土にあつたやり方であり、自分の生活の中に食物・野菜・牛乳というものを組

み入れる方向は、酪農生活で非常に良いことだと思います。

福田正信氏：黒沢先生にお尋ねします。先生の「消費なくして生産なし」と言う言葉に非常に感銘した訳ですが、実は私も酪農の関係の仕事をしていまして、このパンフレットを見ましてこの中の牛乳の殺菌の仕方、超高温から低脂肪、最近のHTSまであります。私の記憶によりますと、超高温殺菌が非常に多く作られています、これは細菌数が30万とかで原料乳がまだ今のように1万単位でなかった時代に止むをえず入れた、という歴史があるということを知っています。それで今後の方向として牛乳の消費を伸ばしていかなければならないのですが、この超高温殺菌をどのように扱ったらよいか。一番近い黒沢さんの方でどのように考えられていますか。

黒沢：昔、日本は酪農も後進国でございましたから細菌が多くて120℃2秒かけないと製品にならないという時代がありましたから、それが今まで続いているということですが、海外では全部パステライズ牛乳になっています。120℃2秒と言うのは、焦げているのですよ。ですから外人が日本に来て牛乳を飲むと敏感な人は「何だ、これは」と言って吐き出したのです。逆に日本人が低温度殺菌牛乳を飲むとあっさりしていて水が入っているのではないのと言います。これは「焦げ」に馴らされているのです。私は前にサツラク牛乳は全部、低温度殺菌牛乳にしようと言ったのです。ところがですね。残念ながら、実際には売れないのですよ。国民の意識がそこまで行っていない。ところがヨーロッパは牛乳と言うのは固まる物だと思っていますから、当たり前と思っています。日本人は固まったらすぐに腐ったと思います。これを直すには国民の意識を直すまでいかにとてなかなかな難しいです。私の所も頑張っていますが残念ながらなかなか量は出ません。

福田：我々も野菜生産で全く同じでして、虫一匹

付かないもの、曲がらない胡瓜とかが重要視され、本来の姿が見えていない。今後の問題であり、これが風土と言うものでしょうか。この辺をPRして行きたいと思っています。どうもありがとうございました。

岡本（根室酪農プラン会議）：今日のテーマにふさわしく三人の先生方のお話し、本当に感銘いたしました。実は日本の教育とは善いことばかり言うとなかなか聞いてくれないので、今日の酪農・畜産・農業全般を反面教師として捕らえてみたら、かなりアピールするのではないかと思います。例えば飼料自給率が今40%以下の状態でありませぬ。それで飼料や肥料を購入します。そのことで牛にも無理が来ます。土地にはミミズも住まない、土地生産が低下します。農家の経済が悪化し、借金病が発生し、それにも気づかず外国の高い機械・施設を導入し、いつしか江戸時代からやってきた日本農業の基本を忘れていないかと思えます。風土にあった畜産とはまさに農業の原点であり、今日の問題を反面教師として訴えて行くこと先行きどうなるかをお伺いしたい。

次に落合先生、根室でもフリーストールをやりながら11月の始めまで結構うまく放牧利用している農家もありますが、ペレニアライグラスが根室はダメだと言いつつ切らないで、それを入れる方策について教えて下さい。それから、田中先生、先生が言われました組織から個の問題として取り上げていく中でやはり何かの現地指導の理念というか、今日の若手の農家は機械・施設をうまく使って経済性を上げている、いわゆる上から下へ下ろすのではなく、現地の研究熱心な農家がやっていることを汲み上げて、一般化出来るようにしたら良いかどうかについてのお考えを宜しく願います。

落合：ペレニアライグラスが根釧でどうかと言う話ではありますが、いろんなやり方で可能性はないことは無いと思いますが。例えば、もう10数年

放牧をやっている今井さんが別海におりますが、ここの草地でペレニアライグラスがまだ部分的に残っているのですから0では無いと思いますが、最近、根鋤でペレを入れたと言って試みに蒔いてみましたがやっぱり消えてしまった例が多いです。今、天北農試で病気に強い品種の育成を行っていますし、もう少しで何とかかなと思います。

座長：落合さんの分野で反面教師的な例は何かありますか。

落合：例えば、牛の病気が今すごく多くなり、牛の寿命が短くなっている所に今の酪農の問題点が現れているのではないかと思います。そこで、牛を良く見ることをやっていけば酪農が変わると思います。

田中：理念を持って指導をしているかと言うことですが、先週二個所で講習会で話させて貰ったのですが、農業者を対象にして必ず話すことが二つあります。一つは自己責任です。これが無い以上、我々はいくら話しても、常に責任を持たされるし、もうそのような時代ではないから、皆さんが考えて皆さんで行動して下さいというのが一つです。それから二つ目は勉強して下さいということを言います。これは量では無く質的な勉強をして下さいと言います。時の流れに伴いどんどん新しいことがわかって来て、本当の意味での根本的な勉強をして下さい。本質を見抜いてほしいと言っています。私は研究と現場とがもつと接近しなければダメだと考えています。研究員が少ない頭数の中でいろいろやってもなかなか善い成果が出ないし数字で表すのは非常に難しいです。だから、変数が多数ある現場に出て、少々ラフになっても構わないと思います。この家畜管理研究会報にも普及側からもどんどん出して、一試験場が一戸の農家に当たりますから、それにかなうものは無いのです。その時自分のデータに自信を持ってやるのが極めて重要なことですし、研究も現場に出る、普及も現場に入って一緒にすることが必要だと考

えます。

黒沢：ものの本に物事を成功する条件というのは一つに勉強好き、二つに素直さ、三番目にプラス思考、この三つであると書いてありましたけれども、案外、勉強好きであつても、素直さがなかなか。農家が「俺はこうだ」と頑張るのが多いですね。で、先ず素直になつて一回考えてみる、それで判断すれば良いのであり、頭からももうダメだと決めてかかるのは良くない、この素直さが大事だと思います。それと当然プラス思考が必要であります。それから、個同志の共生の時代、例えば牛乳を売る場合も牛乳は原料費＋製造費＋流通販売費＝市場価格ですから、そして市場価格は今はすごく下がっています。それに合わせるには原料費を減らすか、製造費を減らすか、流通販売費を減らすしかないのですから、その場合に個では出来ないことがたくさんあります。これをまとめてやると安くなる場合があります。ですから、世の中今はいろんな提携や合併、その他が行われています。要は乳価をいかに下げるかという努力であります。ですから個は大事であつて、いかにその目的を達成するための共生の必要な時代に入ったかと思ひます。

座長：黒沢さんの話は今日の集約のような話になっています。まだ、時間があります。他のテーマで何かありますか。

島田実幸氏：サツラクの組合長さんにお伺いしたいのですが、組合長さんの話を聞いていますと私もサツラク牛乳を飲みたくなりました。きれいに整頓された酪農家というのは共感を受けますが、環境の面で一番難しいのはふん尿処理の面であろうと思ひます。このふん尿処理をどのようにされているかについてお伺いしたい。

黒沢：実はこれについて話し出来るような環境ではありません。本当に問題でございます。先ほど数字で見せましたように急速に規模拡大し、フリーストールもかなりの%を占めていまして、その

結果としてふん尿処理が残ったという感じです。それで、普通の繋ぎの牛舎でも今までの堆肥舎の面積では間に合わない、それにその労力も間に合わないというのが現状です。それで今行われているのは、先ず政府の補助金で自己資金5%の施設作りで出来る農家はやっています。私は状況にもよりますが、金をかけなくても自分の畑を利用して堆肥場から運んでマニュアルプレッダで带状にして置いて、時々それを切り換えして2~3年やりますと完全に府熟します。それを牧草地に撒いています。それに各種の土壌菌を混ぜて促進させています。年間2,000トン搾る亀田牧場では、これをきちんと行っています。あれは土の上で行っていますから土壌菌が繁殖するのです。これから始めて有機に持つて行くのが筋かと思っています。私も勉強したいと思っています。

島田：どうもありがとうございました。

大久保：今まで出なかった話をお聞きしたいのですが、草地をどのように利用するのか、飼料作物をどうするのかというセミナーはなかなか扱いにくい、この辺が何故なのか、皆さんの立場からどのように考えられますか。

黒沢：土地の有効利用の中には土地の生産性を上げる、地域により牧草を作るか、デントコーンを作るか。いずれにしても有効に収量を上げ牛の口に入るまで質を低下させないで持つていく、ということだと思います。私も農家を回って見ますが、デントコーンサイレージは皆さん良く作っていますが、グラスサイレージの出来上がりを見ますと本当に良いという所は5~6戸しかありません。牧草の水分調整が十分でなかったり、穂が出てから刈り取ったりして刈り取り適期を逸した場合があります。従って、本当にサイレージを作るということで原則通り作業を行う場合には、時によっては徹夜でもやらなければならない時もあります。果たして今の酪農家はやっているかと言うとそこに問題があると思います。ですから、簡単に

多収量、土作り、草作りと言いますが、口では言うがお題目であり、まだまだやらなければならないことがたくさんあります。

田中：全ての酪農家、全ての指導者、関係者は土地から得られる飼料の重要性はいつも口にしていきます。しかし、そういかないのは酪農家自身が最終段階を重要視しているからだと思います。つまり搾るといふ所の作業にウエイトを置いています。その点でそちらに目が向いているのでしょうか。私はそればかりでなく自分で飼料をやつて牛乳が出たか出ないか、成分が高いか低いかは一目で分かります。早いのです。ところが草とか飼料作物とかは一年かかってやつと結果が出る、というようにテンポが遅いのです。けれども、酪農家は粗飼料を意識していることは間違いのないと思います。

落合：なぜ、軽視されているかは分かりませんが、こうすれば粗飼料が大事になるという一番の方法は牛を健康にかえるということです。健康な牛から良質の牛乳が取れると言われていています。健康な牛を飼う、そのためには良い粗飼料、そのためには良い堆肥をきちんと入れた所の乾草・サイレージであれば牛は良くなるという話は現場で良く聞きます。それは何故かはよく分からないのですが、やつぱり、最終産物の牛乳の手前の牛自体を良く見て健康に飼えるような粗飼料を作ることが大切です。

大久保：私の質問を逆説的に落合さんが言われましたが、牛なんか病気になったら取り替えればいいさ、と考えている酪農家も実はたくさんいるのではないか。牛の健康をどれだけ皆さんが一生懸命に考えているだろうか。私はもちろん大切なことだと思います。

黒沢：乳が出れば善いのではないかとはいいますが、そんな簡単なものではありません。例えば、牛の健康は飼料・環境と運動が大切です。それらが経済に影響してきます。例えば、不妊になる、

そうすると乳量は少なくなり、経済的に合わなくなる。不健康になると爪がおかしくなる、いろんな傷害が出てくる、結局経済に響いてきます。つめてみると粗飼料が問題である場合が多いです。そこら辺を組合や支援団体がサポートするのが仕事ではないかと思います。

座長：ここで少し感想を言われてもらいますが、この研究会も牛の技術を取り上げていますが、今日のはじめて出た話題は、風土には人間がかなり大きくかかわり合っているということです。風土と言うものは多様性があり、人間がどう考えるかと言うことで大きく変わるということも分かりまし

た。もう一つ、私はここに来る前に情報関係の仕事をしていまして、その当時北海道でパソコン通信が流行っていました。今日の講義を聞かせてもらいましてあの頃から酪農家の間にかなり個ということが考えられていて、必要とする資料はこれだと言うと、優秀な農家はそれに答えてくれる、個が確立すれば共生がうまくいくことも分かりました。これも風土の特徴であつたと考えます。時間がきましたのでこれで終了致します。話題提供者へ拍手をお願いします。(拍手)

(文責 千場 秀雄)